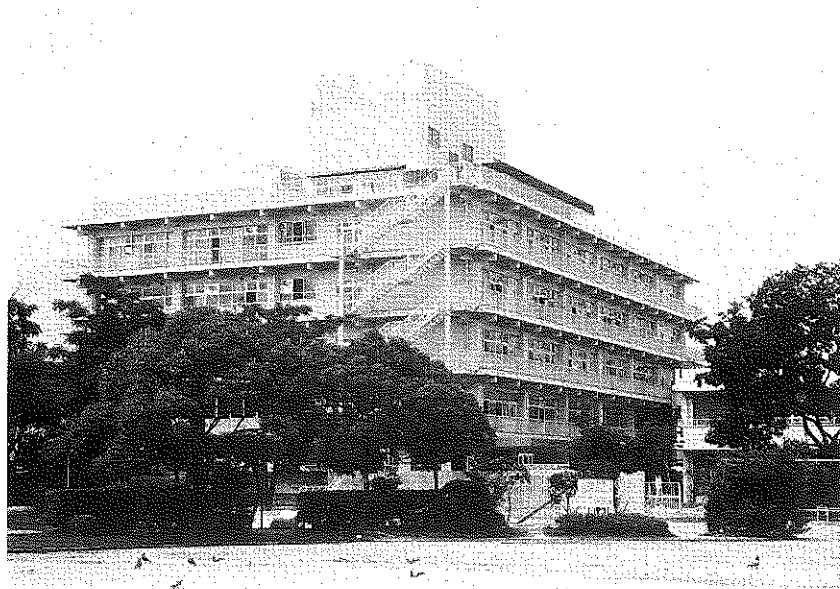


舟入むつみ園

一 般 養 護



舟入むつみ園

忘れえぬ被爆の惨状

青木愛子（七十九才）



被爆地……広島駅（爆心地より一・七km）

当時の急性症状……なし

家族の死亡……なし

現在の症状……肝障害・座骨神経痛・胃炎・糖尿病・高脂血症

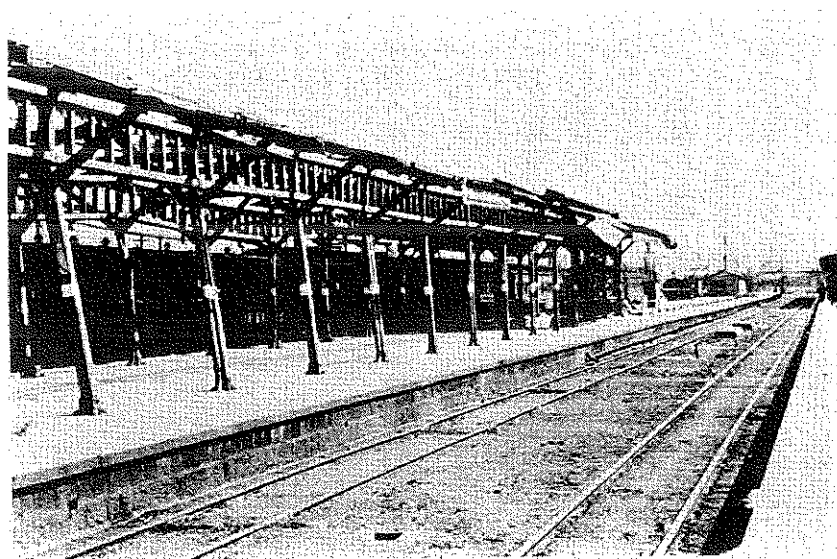
被爆時の状況及びその後の生活

あの日私は、五才の子供を実家に預け、九州八幡市にある自宅に戻るところでした。

朝六時に実家を出て二時間あまり、広島駅に着いたら空襲警報、すぐ解除になりやれやれと思った瞬間ピカッと光って、ドドーンというもの凄い音、同時に窓ガラスが吹き飛んだ。私は切符を買っため、駅の中央部に居りましたので怪我はしませんでした。駅前の広場に出ると外に居た人達は皆髪の毛が中立ちになって火がついていました。半袖を着ていた人々は腕を火傷し、皮膚がぼろ布のようにはがれて垂れ下がっているんです。広島駅の前は幽霊のような人々が右往左往するばかりでした。その時、本当の姉のように慕っている人が近くに居るのを思い出し急いだ。途中の路では怪我人が「お

水ちようだい」「苦しい助けて」と叫んでいるが、姉代わりの人のことが気掛かりで、怪我人さんを踏み越え乍ら一生懸命歩きました。夕方四時頃ようやく辿り着きました。家は半壊状態でした。「お姉さん、お姉さん」と叫ぶと奥の方から「ここよ、苦しい、助けて！」と叫ぶ声がしました。私は倒れた柱や、壁に邪魔されながらそこ迄行くと、背中に子供をおんぶして、もう一人「苦しい、お母ちゃん苦しいよ！」と泣き叫ぶ子供を抱っこしていました。背中の子は、家の棟木が肩にくいこんでいる「正午頃迄は泣いていたけど、泣かなくなっただけからもう息は切れていると思う。抱っこしている子供だけは助けてやって」とその人が……。

あたりはもう隣の家迄火がついているんです。「お姉さんごめんなさいね、さようなら」と言つて、その子を抱き泣き泣き私はそこを離れました。

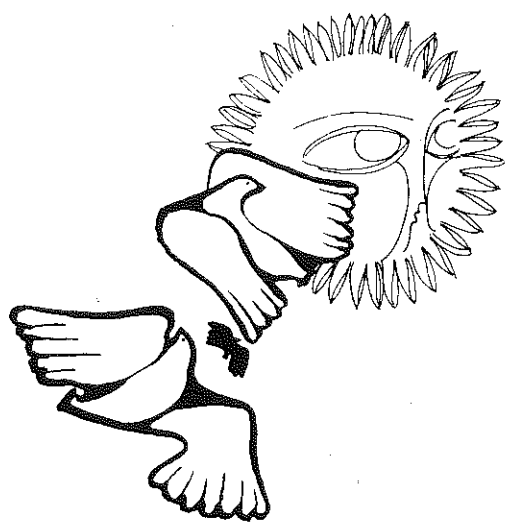


広島駅構内 プラットホームの屋根は吹き飛び柱も傾いたまま。
(中国新聞社提供)

その子も今は立派に成人し、幸せな家庭を築いております。

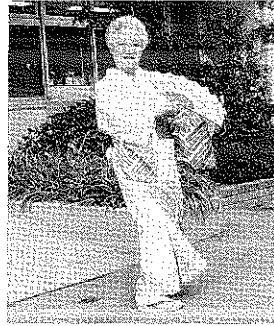
あれから五十年、今はむつみ園で暮らし、戦後のきびしさを忘れるほど平和な豊かな時代を迎え、有り難いと思っております。

尊い犠牲になられた多くの方々のご冥福を祈り、争いのない真の平和が続きますようにと、心をこめて祈る明け暮れです。



救出できなかった妹

石井 ミ子コ（八十一才）



被爆地……広瀬北町（爆心地より一・五km）

当時の急性症状……下痢・全身倦怠・出血・脱毛・食欲不振・外傷（手・

頭）

家族の死亡……次女

現在の症状……高血圧症・心不全・胃潰瘍・動脈硬化症

被爆時の状況及びその後の生活

当時私の長女は三次に疎開しておりました。次女と私、私の兄妹が一緒に住み、アイスクリーキ屋をしておりました。

その朝、ピカツと光った瞬間、家が裂けたようで、私は家の下敷きになってしまいました。右手だけがなんとか動いたので土を堀って出ようと思いましたが無理でした。怪我をしながらも瓦礫の下からなんとか這い出した兄が、爆風で飛ばされ動けずに泣いている私の娘を見つけ、連れて広瀬橋迄行き、私達のこと気づいて家に引き返しました。瓦礫に埋もれている私達を必死で助けだしてくれました。

が、火がせまり、末の妹を救出することができず哀れにもむし焼きの状態で死亡しました。夕方、近くの軍需工場でおむすびを貰いまして食べようとしたが、歯が痛く食べられません。口に手をあててみて、はじめて上の歯が全部折れていることに気づき愕然としました。

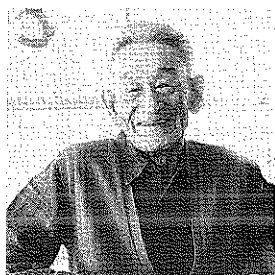
その後、母の郷里である大分県の国東半島へ行き、米を売ったり、タバコを作って、神戸の闇市へ売りに行ったりしておりましたが、被爆時怪我をした次女の様子がおかしく、兄の勧めで広島に帰り、娘を日赤病院へ入院させました。六ヶ月後に吐血した娘は亡くなりました。その後、何度も転職し六十二才迄働きました。それ以来ずっと一人暮らしです。

七十二才の時、朝、目がさめると体が動きません。どうすることもできず、寝たままの状態で三度も失禁しました。その後、なんとか動けるようになり、娘に電話し温品にある山崎病院に入院することになりましたが、一年間で退院することができました。娘は退院後は同居を勧めてくれましたが、娘の家庭を考え、ホームへの入園を決意しました。

今は、大勢の仲間も居ります。舞踊クラブ、琴クラブに参加し、有意義な日々を過ごしております。

この世で地獄を見た

石 山 鉄 男（七十九才）



被 爆 地 …… 金屋町（爆心地より一・六km）

当時の急性症状 …… 外傷（頭部・足）

家族の死亡 …… なし

現在の症状 …… 慢性気管支炎・不眠症・胃炎

被爆時の状況及びその後の生活

私は妻と東雲に住み、宇品の鉄道局に勤めていました。八月六日は仕事がありましたので、竹屋町の叔母に会いに行きましたが、叔母は仕事に出て留守でしたので、家に帰る途中金屋町で被爆しました。どこで怪我をしたのか分かりませんが、気がつくとも頭から出血していました。囲りは火傷し皮膚がめくれている人や、水を求め叫んでいる人、すでに死んでいる人等、まるでこの世で地獄を見た思いがしました。自宅へ帰ってみると表側のガラスが割れて、それが家中の柱に突き立っていました。家はつぶれてはおりましたが、家中めっちゃめっちゃで足の踏み場も無い有様で、寝ることもできず、家の前のハス畑に蚊帳を持ち出して三日間くらい野宿をしました。しかしどうにもならな

いので実家のある可部町に帰ることになりました。可部線は、長束駅迄通っていましたが、そこで歩いたのですが、途中の横川駅の倉庫には、死体がいっぱい目を覆うばかりでした。

可部町に帰り終戦を迎えましたが、同時に鉄道を退職し、可部で山仕事をして生活するようになりました。

その後、二人の娘に恵まりましたが、妻とは離別、娘達も嫁ぎ、一人暮らしとなり、高齢と病気に對する不安から、ホームへの入園を決意しました。

現在は心配することもなく、ホームでの生活を楽しみ過しております。



体は動かず死を覚悟

植田 良子（七十二才）



被爆地……竹屋町（爆心地より一・五km）

当時の急性症状……出血・脱毛・外傷

家族の死亡……母親、姉

現在の症状……不眠・解離性大動脈瘤・腰椎ヘルニア・骨粗鬆症

被爆時の状況及びその後の生活

あの日、私は腹痛のため仕事を休み、一人で朝食を始めた時、飛行機の音がして、見ると真白な大きな機体がゆっくりと低く飛んでいました。とつぜん光に目がくらみ、瞬間、家と一緒に押しつぶされ真暗になりました。気がついて光をたよりに少しづつ手でかき分け、やっと顔だけのぞかせてみると、回りは火の海でした。体は動かず、呆然となり、逃げようと思う気もなく、死を覚悟した時、通りかかった男の人が「早く逃げろ！」と、埋もれた私の体を引き出し、はだしの足に、亡くなられた人のぞうりを持ってきて、はかせてくれました。炎の中を牛田の山迄逃げました。

その夜、広島町の真赤に燃えておりました。その後も三日間燃え続け、四日目に市内に向かうト

ラックに乗せてもらって行きましたが、川は死体でいっぱいでした。この世の地獄だと思い何度も身震いをしました。

牛田の学校でやつと母と姉に逢うことができませんでした。母は体半分を火傷、姉は全身が火傷でズルズルになり、はげた頭が恥ずかしいと手ぬぐいで頬^{ほお}被^{おか}りをしておりました。看護の甲斐もなく、二人共亡くなってしまうました。

私は一人ぼっちになりました。福山の親戚を頼り、洋服屋の事務員をして働きました。その後、親戚や近所の人達の助けがあり、元住んでいた竹屋町へ帰ることができました。

舟入むつみ園への入園については自分で決めました。自分のためにも、子供のためにも良いと思ったからです。余生は、自分なりに幸せを作って行こうと思っております。



水主町付近 水主町（現在の加古町）付近の焼け跡。石碑がボツン。はるかかなたに原爆ドームが見える。（中国新聞社提供）

消息の分からぬ父母を偲んで

清 本 幸 子（七十七才）



被 爆 地……東観音町（爆心地より一・一km）

当時の急性症状……発熱・全身倦怠・出血・脱毛・食欲不振・外傷（体

中にガラスの破片）

家族の死亡……両親

現在の症状……高コレステロール・血症・耐糖能障害

被爆時の状況及びその後の生活

警報が解除になり、トイレへ行こうとして廊下に出た時、ピカッと閃光が走ると同時に廊下のガラスがバリバリという音と共に降って来ました。両腕と胸には、まるで、待ち針を刺した様になったんです。私は恐ろしくて何が起こったのか分からないままにその場に座り込んでいました。斜いた家の中にはいながら入り、服を引っ張り出して着ようと思いましたが、ガラスの破片が両腕に刺さっていて服が脱げず一人で大きな破片だけを抜きましたが、そこから血が吹き出して来て服は真赤に染まっていました。被爆された人々は、服も体も髪もボロボロになり、皆、黒い雨の中を黙々と目的もな

く歩き続けました。私もその人達の後をついて同じく、あてどなく歩いたのですが、途中で意識がなくなり、五日市小学校に收容されていたのです。気が付いたのは被爆後十一日目のことです。気が付いてみると、体中ザクロの様になっていたんです。その後草津の收容所に移され、そこに二ヶ月位いました。

古市の伯母が收容先を捜し当て、自宅に連れて帰り療養させてくれました。地獄に仏とはこの事だと感謝しましたが、やっと歩ける様になったのは三年もあとの事です。

両親の骨も見つからないまま、私の視力も除々に落ちて行くのが分かりましたが、いつまでも伯母に甘えてばかりもおれず、知人の紹介で酒屋の經理の仕事を始めました。

その間も消息の分からない両親を色々と捜しましたが、今だに見つかりません。

昭和三十二年に結婚しましたが、子供も無く性格の不一致で離婚し、又働く様になりましたが、心痛が重なり胃潰瘍になり、自宅で臥せていましたが、援護課の保健婦の勧めで、鉄道病院で入院加療をすることになりました。その間にホームへの入園手続きをしてもらい平成三年三月に入園しました。

この一発の爆弾で、私の人生はすっかり変わってしまったのです。わりに裕福で、しかも一人っ子ということもあり、両親に大事に育てられていたのですが、戦後の私の生活は今までに比べると天地の差でした。

でも、ホームに入ってから生活の心配もなく各クラブにも参加し、同じ体験を持つ友達にも恵まれて、本当に良かったと思っています。

もう二度と戦争はいやです。一番先に犠牲になるのは、弱い女・子供なんですから……。フランスや中国などの被爆実験の話を聞くにつれても、激しい憤りを覚えます。

今は世界中の核が無くなる事を念ずるばかりです。

体中ガラスの破片が刺さった

高野 芳子（七十一才）



被爆地……観音本町（爆心地より一・七km）

当時の急性症状……下痢・発熱・全身倦怠・出血・脱毛・食欲不振・

火傷・外傷

家族の死亡……妹

現在の症状……高脂血症・糖尿病・高血圧症・萎縮性胃炎

被爆時の状況及びその後の生活

当時は、両親と私、妹は宮内に疎開しておりました。父と私は会社に、妹は女学生でしたので建物疎開で土橋へ行くため、三人一緒に家を出て、己斐の駅で別れ、それぞれの職場に急いだ。私は観音

本町にある会社に着いた直後に被爆、気がついた時は地下に降りていました。顔中にガラスが刺さっていました。

友達に地下から助け出してもらいまして、西大橋を渡り己斐から高須に逃げる途中、ふり返って川の方を見ますと、アリのように人がうじゃうじゃいて、回りは火の海でした。あちこちで「助けて」「助けて」と叫んでいるんですが、自分が逃げることに精いっぱいです。どうすることもできませんでした。

高須の付近で黒い雨にありました。

夕方、トラックに拾われて廿日市迄連れて行かれました。そこで両親を迎えに来てくれましたが、血と黒い雨で汚れていた私の顔は始め分からなかったようです。

広島の方は真赤に燃えていました。

妹とは己斐で別れたままです。土橋で死亡したのですが、今だに消息不明のままです。

顔のあちこちに切傷があり、目は引吊り、顔全体がむくみ醜くなっていました。母が近所の人に「まるで鬼のようだ」と話しているのを聞き腹が立ちました。通院の時も周りの人の目を気にして、電車には乗らないで廿日市から五日市迄、乳母車で通いました。

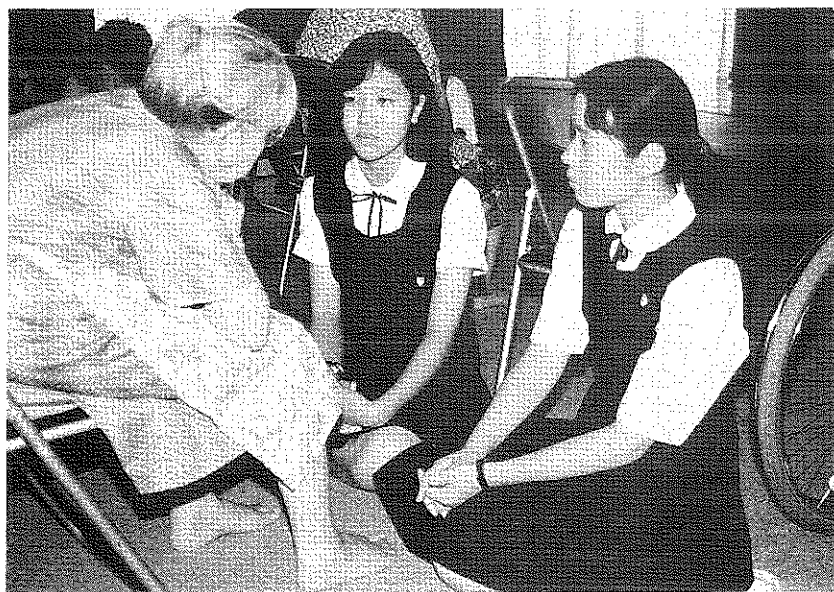
顔の手術は二回しました。洗顔の都度痛みがあり、ガラス破片が何ヶ所にも入って度々切って出るのがとても苦痛でした。

二十三才の時結婚したのですが、相手が被爆者でなかったものですからうまくゆかず、四年目に離婚しました。

その後二十八才で再婚し、ようやく落ち着いた生活をするこゝがてきました。

昭和六十二年に夫が亡くなりまして、五年間一人暮らしをしておりましたが、心臓が悪く、不安を感じるようになり、原爆養護ホームの入園を決意しました。

入園しましてからは、書道、手芸、生花等様々なクラブにも参加させていただき、楽しく充実した日々を過ごしております。そして、全国から慰問に来て下さる修学旅行の生徒さん達に、つらかった被爆体験をお話して、少しでも平和教育に役立てていただければと願っております。



高校生の平和学習

あの日の光景はこの世の地獄

米 山 満 義（七十六才）



被 爆 地 …… 基町（爆心地より1km）
当時の急性症状 …… 頭、左胸、肩の怪我、打撲
家族の死亡 …… なし
現在の症状 …… 脳梗塞後遺症・慢性胃炎

被爆時の状況及びその後の生活

私は、神石郡永渡村に両親と共に暮らしていました。昭和二十年八月四日召集を受け、広島十二連隊に入隊しました。

八月六日、基町の兵舎で被爆、倒壊した建物の下敷きになり怪我をしました。やっとの思いで外に出ると、街は火の海で、路上には黒焦げになり腹がパンパンに腫れた死体が無数に転がっていました。それは悲惨で目を覆う光景でした。街中悪臭がひどく、荷車で死体を収容し、あちこちで茶毘に付していました。まるでこの世の地獄でした。

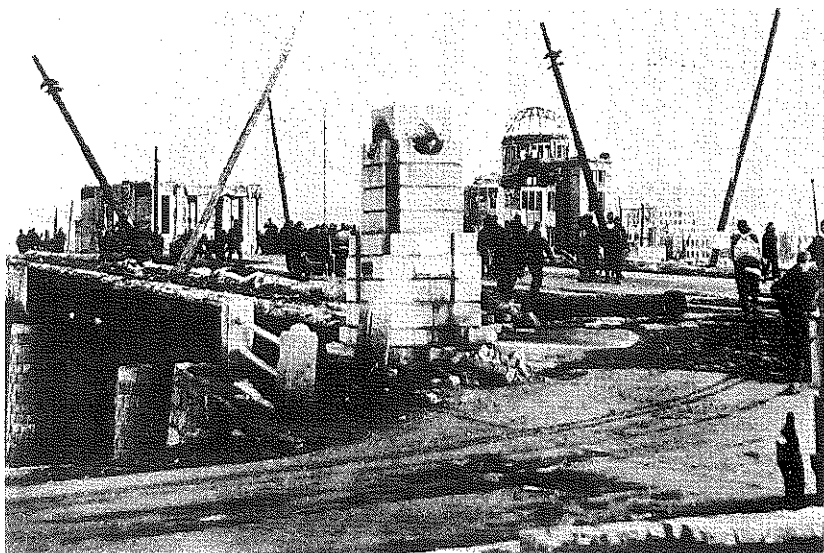
私は必死で歩き、戸坂の民家（小田宅）へ辿り着き、その家で一週間お世話になりました。田舎か

ら両親が心配して来てくれました。両親に付添われ本隊へ行きましたが、跡形も無く全焼し、本隊跡には救護所ができていました。そこで治療を受けた後、庄原赤十字病院へ行き治療を受けるようにと指示されたため、両親と共に郷里に帰りました。

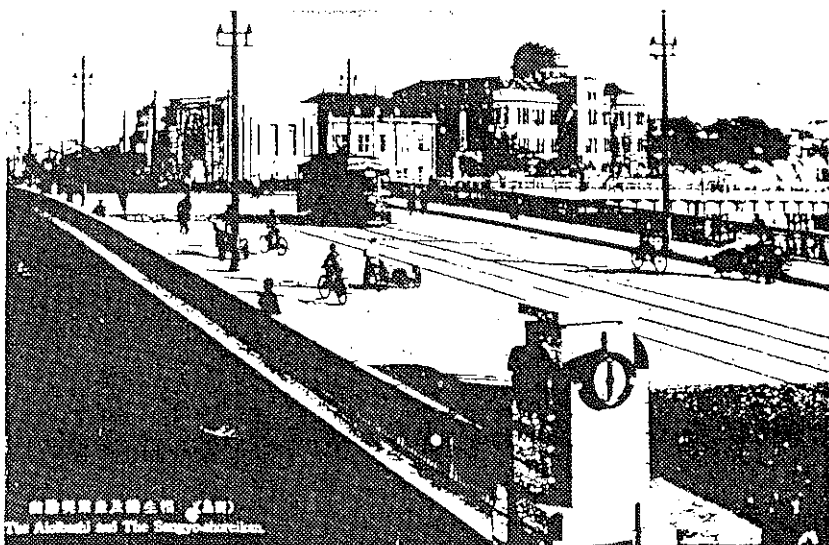
ようやく体が回復した昭和二十年十一月、神石郡東城町の警察署に勤務することになりました。

昭和二十四年に結婚し、二男、二女に恵まれた。その後警察を退職し、飲食店を始め、しばらくは続きましたが経営に失敗し、妻子を残して、昭和四十一年単身で広島に出てきました。昭和六十一年脳血栓で倒れて入院、軽い片麻痺もリハビリにより回復、少し言語障害がありますが日常会話には支障ありません。

平成四年舟入むつみ園に入園しました。指先を動かす手作業は良いリハビリになると聞いたので、和紙工芸に取組み、楽しみ乍ら、心安らかに日々を過ごしております。



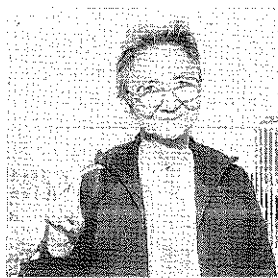
相生橋 原爆投下の目標となった相生橋。
 目標よりわずかに南東にそれたものの破壊ははなはだしい。
 (中国新聞社提供)



被爆前の相生橋
 (中国新聞社提供)

心の傷は癒えないままに

佐々木 浅子（七十四才）



被爆地……舟入幸町（爆心地より一・五km）

当時の急性症状……両手首・左顔面の火傷・脱毛

家族の死亡……なし

現在の症状……高血圧症・変形性腰推症

被爆時の状況及びその後の生活

警報が解除になり、ほっとして米の配給を受けるため、外に出たとたんにピカッと閃光が走り、一瞬何が起ったのか分かりませんでした。同時に両腕と顔に、焼け火箸を押し当てられた様な痛みを感じた。「大変なことになった、母はどうしているだろう……」すぐにその事を思いましたが、焼けついた顔を冷やそうと近くの井戸水で顔を洗うと、両手と顔の皮がズルリとむけて垂れ下がってききました。が、不思議と痛みは感じませんでした。それより実家の家族のことが気になり、母の元へ走りました。その途中でも被爆した人々が、まるで化物みたいな姿で川へ向って歩いていました。私もあの人達と同じだと思い「地獄じゃ！地獄じゃ！」と何度もつぶやきながら実家へ走りました。

家は崩壊していましたが、幸い家族は全員無事でした。母は私の顔を見るなり「まあ／まあ／」と言いながら頭をさすり、ただ泣くばかりでした。その夜、天満川の川伝いに自分の家に帰る途中では水を求めて川に入り、そのまま上つて来れなかった人の死体で川は一ぱいでした。一緒に歩いていた人も「水を下さい」と言いながら次々と息絶えていきました。

その後は実家の家族と一緒に防空ごうの中の生活を始めましたが、被爆で受けた傷は、日増しに化膿し、悪化してきましたが、治療する薬もなく、食料もなく寝たつきりになり、秋口になりやつと立てるようになりました。その頃、似の島の親類の者が小さな小屋を建ててくれて、食料品も運んでくれる様になり、やつと一息つけるようになって、あの八月六日の悪夢をふり返られる様になりました。いつまでも実家の世話になっている訳にもいかず、知人の世話で江波の三菱工場で働くことになりました。

その後、昭和二十二年結婚し、一男一女が出来ました。主人は体が弱く働けずに床に着く日が多く、私が一家の柱として病弱な主人と幼い二人の子供を抱えて、なりふりかまわず働きました。その主人も昭和四十一年に亡くなり、子供達も各結婚しましたので、内職などして暮しましたが、私も高齢になり病弱でもあったため老後の事を考えて、ホームに入園することに決めました。

現在はあの頃の事を思うと天国です。生活の不安もなく、医療面でも隣接した舟入病院があり安心していますが、ただ、フランスの核実験や、中国が核を保有していると、テレビや新聞等で聞くと大変心が痛みます。私達の様な被爆者の苦しみは世界中の誰にも味わってほしくありませんから……。

ピカが奪った私の夢

末 永 博 明（六十八才）



被 爆 地 …… 流川（爆心地より一・二km）

当時の急性症状 …… 下痢・発熱・全身倦怠・出血・脱毛・食欲不振・

火傷・外傷

家族の死亡 …… なし

現在の症状 …… 貧血・肺気腫

被爆時の状況及びその後の生活

私は音楽の大好きな少年だったが、十九才で兵隊に志願し一年後には、幟町にあった軍隊の兵舎に寝泊りしていました。

忘れもしない昭和二十年八月五日の夜、八丁堀から流川のあたりをパトロール中、疲れのあまり建物の隅に腰を掛けたまま眠り込んでしまい、あの八月六日の朝を迎えました。

夏の暑さとまぶしい太陽の光でもうろうろとしている時、まるで世の中全体がフラッシュをあびたようになりました。ドーンゴロゴロと耳元にかみなりが落ちたかと思うと同時に、吹き飛ばされたよう

に地面に叩き付けられました。しばらくして腰の痛みで目が覚め、必死の思いで地面を這いずりながら逃げました。「助けて下さい」「助けて下さい」と言う悲鳴があちこちから聞こえてきましたが、人さまを助けるどころか自分が逃げるのに精一杯で、どうすることも出来ませんでした。今でも、その言葉は脳裏から離れません。

父と弟は買い出しに行っていたため無事でした。母と妹も大火傷をしましたが無事でした。

それからは貧血症と闘いながらも、好きな音楽の勉強をしていましたが、音楽の世界で生活するにはあまりにも貧しく断念せざるをえませんでした。

三十四才で社会復帰のため上京し、知人の紹介で大手の銀行にノミネートされましたが、自分が被爆者であることは隠しての入社でした。十二年間は無事に務めました。その後体調を崩し肝臓を患い入院することになりました。入院を機に被爆者であることが分かり、銀行に行き辛くなり、しかたなく退職することになりました。この年四十五才を過ぎておりました。再度、広島に帰り両親と暮らしていましたが、入院をくり返しながらの生活でした。両親も他界し、体力の衰えとともに、一人での生活に不安を覚えるようになりました。そんな時、自分を心配して下さった方々の勧めもあって、原爆養護ホーム入園を決意しました。五十年すぎて思うことは、自分の考え、想いとは裏腹に過ぎて行く人生を、何度恨めしく思ったことか。「広島に原爆さえ、投下されなかったら……」と。

今は生活には不安は無くなったが、何か大切な物を失ったような気がしています。

これからはせて好きなピアノに生き甲斐を求めていると思います。

命を救った夫の大きな愛

樽谷ナカ(八十四才)



被爆地……田中町(爆心地より一・二km)
当時の急性症状……下痢・脱毛・発熱・火傷・嘔吐
家族の死亡……なし
現在の症状……高血圧症・心肥大・肝機能異常・耐糖能障害

被爆時の状況及びその後の生活

あの朝は、一回目の警戒警報が解除になり、ほっとして上衣を脱いだ時でした。遠くへ行ったと思っていた飛行機が、突然引き返して来ました。その瞬間ドーンと大きな地鳴がし、気がついた時は真暗で家屋の下敷になっていました。身動き出来ないでいると、「五十メートル先の竹屋小学校が燃えているぞー」と言う主人の声がしました。「助けてー」とありったけの力で主人を呼びました。

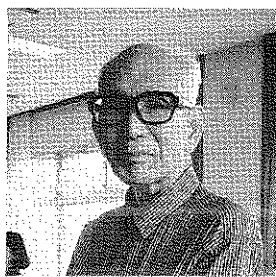
私はもうここで死んでもいいと覚悟をきめた時、主人が「こんな所で大切なおまえを死なす訳にはいかん」と、崩れた瓦礫の間から私を引っ張り出してくれました。どこから見つけて来たのか自転車を持ってきて、立てなくなった私を乗せ、知り合いの病院へ連れて行ってくれました。上衣を脱いで

いたため、腕にはガラスの破片が刺さっていて、顔は火傷、切傷等で腫れあがり、あわれな姿でした。たまたま一人残っていた看護婦さんに、応急手当をして頂き、比治山から府中の方へと逃げました。途中異常なほど喉の渇きを覚え、「水がほしい、水がほしい」と夫に訴えました。その時、私の我がままに飲んだ一口の水が、後で苦しむ結果になるとは、思ってもみませんでした。それは放射能が入っていて飲んではいけなかったと聞きました。嘔吐はする、血便は出る、発熱はするそんな状態が何日も続きました。夫の必死の看護のお陰で一命を取り止めることが出来ました。疎開先の皆さん、知りあいのお医者さん、主人には今でも感謝の気持ちでいっぱいです。可部の方に疎開していましたが、一年後には田中町に戻り、家を建て直し前にやっていた製氷業を再開しました。

それから、主人が亡くなる十七年前までは、平穩な生活を送っておりました。左腕の傷は適切な治療のお陰で良くなり、好きな三味線を楽しむことが出来るようになりましたが、病院との縁は今も切れることはありません。年齢と共に、一人での生活に不安を感じるようになり、ホームにお世話になることにしました。ホームでは、舞踊クラブ等に参加し、楽しい日々を送っています。主人の月命日にはかかさず墓前にお参りし、一カ月の出来事を報告しております。

余生は平和学習の手伝いを

土岡善人（六十六才）



被爆地……福島町（爆心地より一・八km）

当時の急性症状……外傷

家族の死亡……父

現在の症状……気管支拡張症

被爆時の状況及びその後の生活

十五才の時、船にあこがれ大阪の商船会社に就職しましたが、ほとんど仕事は無く、新年を迎えるため広島に帰っておりました。父は、義理の母と弟、兄とで生活し、私は姉達と四・五百メートル離れた別の場所で生活しておりました。八月六日の朝、私だけが寝ていてそろそろ起き上がると思っていた時に、あの生々しい大悲劇が起きました。ピカーと、光ったかと思うと同時に、後はどうなったのか定かではありませんでした。姉達は逃げ出し、私は家の下敷きになっていました。もがきながらもどうにかはい出ることが出来、気が付くと道路端にぼう然と立っておりました。

電車路まで出てみると、中央から己斐の山に向って傷を負った人、火傷をした人達が、逃げ迷って

いました。どれほど時間が経ったのかわかりませんでしたが、私もその群の中に入って歩いていたところ、運よく姉達と会うことが出来ました。今度は、父達のが気になる、父の家に行ってみますと、家は大破し、義理の母と弟がその瓦礫の下になっていたので、引つ張り出し、何かの時は集合することになっていた叔父の家に、連れて帰りました。待つても待つても父は約束の場所へ帰ってきませんでした。翌朝姉と二人で又崩れた父の家に行つて探してみますと、瓦礫の下から冷たくなった父の姿を見つけがく然としました。

父を亡くしいつまでも悲しみにふける余裕はなく、兄の勧めもあつて福岡県飯塚の炭坑へ入りました。そこで、結婚し長男を授かりましたが、結婚生活は長く続かず離婚となりました。その後、再度広島に帰り、子供は姉に預けることにしました。二十五才で肺結核・肝臓病を患い、十三年間療養生活を送りました。



市内の幼稚園児の慰問

健康を回復し、仕事が出来ようになった時には、四十才を過ぎておりました。六十才までは、なんとか自立した生活を送っておりましたが、六十才を過ぎた頃から体力も衰え、今後の生活への不安を感じ、ホーム入園を決心しました。今となつては、ホームに入れたことを幸せと思つて、これからの平和学習のお手伝いをさせて頂きたいと思つています。

如来様が助けて下さった

都 河 寿 子（七十二才）



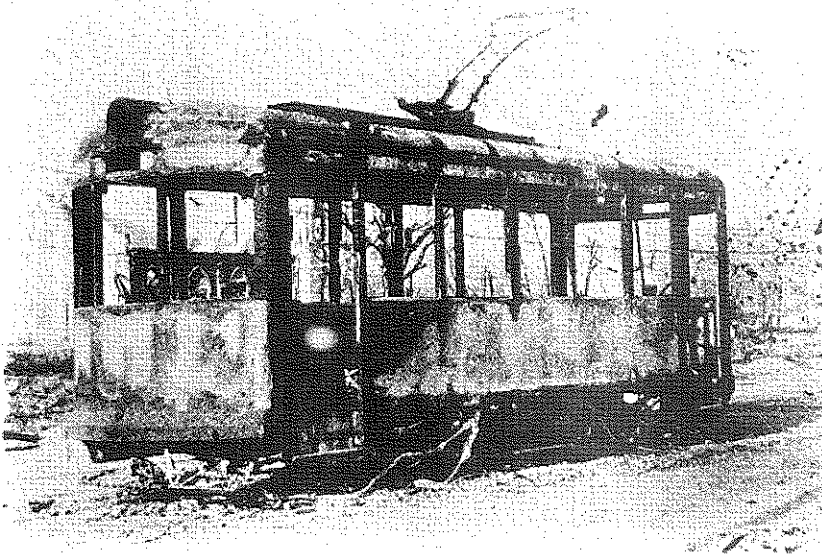
被 爆 地 …… 鉄砲町（爆心地より〇・八km）
当時の急性症状 …… 下痢・発熱・脱毛・食欲不振
家族の死亡 …… なし
現在の症状 …… 高血圧症

被爆時の状況及びその後の生活

私は山県郡芸北町の正圓寺という寺の長女として生まれました。女学校卒業後県庁に勤めたが、戦争のため通信隊に入り、宇品の造船所で事務員をしておりました。

その日は、午後からの仕事でしたので、二階で寝ておりました。大きな衝撃の後、きれいな女の人に抱き起こされたようで気がつきました。見回すと、囲りには何も無く、あちこちで火が燃えていました。私は何時間もそこに倒れていたようです。後にこのことを母に話すと、如来様が助けて下さったのではないかと申しております。

京橋川の砂地を^{はだし}で渡り、牛田の山へ逃げました。足の痛みなど全く感じませんでした。途中で五才と三才の姉妹が「一緒に逃げて」と言うので両手に連れて必死で歩きました。途中で見た光景は今も目に焼きついております。電車の吊り革を持ったまま黒焦げになっている人、電線に巻きついた女性の長い髪、それは凄まじいものでした。やつとの思いで可部の町にたどりつき、そこで草履とカンパンをもらいました。二人の姉妹ともそこで別れました。その後どうされたのかと、ずっと気にかかっております。



丸焼けの市内電車 流川の電車通りで被爆し、丸焼けになった市電。
爆心地から約900メートル (中国新聞社提供)

私は農家に二日程泊めていただきました。父が迎えに来てくれて、芸北の家に連れて帰ってもらいましたが、体調が悪く、何年も半身不随の状態が続きました。何か食べても、水を飲んでも、嘔吐するものですから看護婦さんが体にあるためだと言い、両腕と股を切開したのです。今も大きな傷跡が残っています。

体の不調が不安でホームへの入園を決めました。今は穏やかな日々を過ごしております。

娘ざかりは恐怖の毎日

寺尾隆恵（七十三才）



被爆地……舟入町（爆心地より一・六km）

当時の急性症状……脱毛・下痢・発熱・嘔吐

家族の死亡……なし

現在の症状……狭心症・喘息

被爆時の状況及びその後の生活

当時、私は二十四才で娘ざかりでした。横川町に住んでいて、尋常小学校卒業後、日本興業銀行に

務めておりました。当時は、自分の身なりなど考える暇はなく、ただひたすらに働いておりました。あの朝もいつもと、変わらない朝でした。一瞬の内に私の一生は狂ってしまい、気がつくの家屋の下敷きになっていました。やっとの思いで這い出ることが出来ましたが、両親はまだ家屋の下敷きになつたままでした。助けを求めても回りは大惨事です。他人どころではありません。私は必死で瓦礫の下から両親を助け出しました。

着ていた衣服はボロボロ、体は傷だらけ、回りの誰もがそんな状態でした。

三船橋まで行き、川にイカダがあつたのでそれに乗り、観音橋に出て己斐小学校で応急処置を受け、五日市、楽々園にと逃げ場を捜し転々としました。一週間過ぎ、今度は安佐郡佐東町緑井まで行き、やつと住む場所を決めた時には、髪はパサパサ、下痢、発熱と、原因が解らず恐怖の生活でした。

それでも私よりもつとひどい状態の人達のためには、看護のお手伝いをさせて頂きました。それから、生活のためにいろんな仕事をしてきました。三人の子供にも恵まれましたが、長男は四才で死亡。その後長女、次男は独立し、一人暮らしとなりました。年々体力も衰え、狭心症・喘息の発作、と、不安を感じるようになり、むつみ園に入園することにしました。今は皆様に良くして頂き、やつと落ち着いた生活を送っています。これからは、語りべの一人として、慰問に来てくれる子供達に平和について伝えて行き、今の幸せに感謝したいと思います。

母を捜し死体のムシロをめくる

西 中 シズコ (六十九才)



被 爆 地 …… 水主町 (爆心地より〇・九km)

当時の急性症状 …… 顔面挫創

家族の死亡 …… なし

現在の症状 …… 緑内障・左膝関節拘縮・心疾患

被爆時の状況及びその後の生活

当日、母は向いの家の玄関先に居り、背中に火傷、一番下の弟は、下駄箱と自転車間に居て無傷でした。私は自宅に居りました。ピカツと光ったと思ったら家の下敷きになっていました。少し光が見えたので、足をかけ出ました。気がついた時は外に居ました。困りはまっ暗、火の手があちこちに見え、だんだん明るくなってきました。非常食の有り場が分かったが、体がしんどく、リュックサックが持てませんでした。必死で母を捜したのですが分からず、川岸のガングの所で母を待った。一度に人が崩れて移動したため転んだ人は踏みつぶされた。何かあった時已妻に行くことになっていたのを思い出したのですが、対岸の材木屋が燃え、火の勢いが強く、反射熱で熱くて橋が渡れませんでした。

た。私は火の中を逃げまどいました。夜になり「痛い」「助けて」と叫ぶ人が沢山おりましたが、夜が更けるにつれて声がしなくなり、朝になると囲りの人達は死んでいました。死人にはムシロがかけられていました。私は母が居ないかとそれをめくり確かめて歩きました。皆顔が丸く腫れ、目も、口も丸く同じようになっていました。母は見つかりませんでした。

父が商売をしていた大手町迄行こうと思いましたが地面が熱く思うように歩かれませんでした。途中、二人の子供を見たのですがその異常な姿は、今も脳裏に焼きついております。一人は背をそらせ黒焼け、もう一人は両手をつき上半身黒焼けで、内臓が飛び出し黒焦げになっていました。夜は寒く、大人が燃え残りの木材を集めて焚火をして暖をとりました。三日目の朝、弟に出会い、母が草津に居ることを知ることができました。

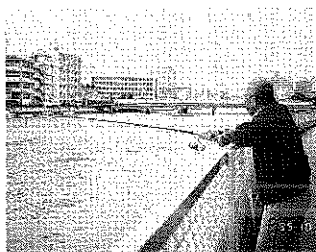
その後、叔父、叔母の居る呉に行き、母は、海軍病院で背中の治療を受けました。

私は、年々どんどん目が悪くなりました。それが原爆のせいだとは気がつきませんでした。体調も悪く、ABC Cを受診、肝臓が悪いと言われました。胃がいれんもあり、体が弱った時は、皮膚全体が神経になり、茶わんを置く音にすら痛みを感じました。窓からさし込む光も気になり、目に黒い布をかけていました。家族は心配し、医師に最善の治療を依頼、リングルを足に二週間注射し、ようやくおかゆが食べられるようになり、目の黒い布が取れるようになったのは二十四才の時でした。

被爆から五十年、母は他界、夫にも先立たれた今、見えない目と、痛む体に不安を覚えながら、ホームの皆様に支えられて暮らしております。

悔やまれる一ぱいの水

西原 昭治（六十八才）



被爆地……大芝町（爆心地より二・八km）

当時の急性症状……下痢・嘔吐・全身倦怠

家族の死亡……なし

現在の症状……糖尿病・アルコール性肝炎

被爆時の状況及びその後の生活

家族が揃って朝食を済ませたところでした。ピカツと光り、瞬間に家が倒壊しました。家は焼けませんでした。が、崩壊した建物の下敷きになり、何とかはい出た時は、ほこりだけでうす暗かった。おかげさまで家族に怪我はありませんでした。いったい何が起きたのだろうと思ひ、周囲を見渡しましたが、木造家で建っている家は、一軒もなく壊れておりました。私は、呆然と立ちすくみ歩けませんでした。

ようやく歩きはじめましたが、道々には、まるで幽霊のように手を前にさし出し、「水を」と言いながら大勢の人達が歩いておりました。

大芝公園と崇徳学園で、上半身裸になって訓練を受けていた鉄道隊の補充兵達は皆火傷し水を求めて来ました。しかし、衛生兵から水を「飲ませないよう」との命令を受けておりましたので、あげませんでした。翌朝、殆どの兵隊さんが亡くなっておられました。こんなことなら飲ませてあげればよかったと悔やまれました。今思っても心が苦しくなります。

三日後から、大芝公園に瓦礫でバラックの家を建てて住みました。

八月十五日、榎町に居る叔父、叔母のことが気に掛かり訪ねてみましたが、二人共、亡くなっていました。その後、元住んでいた場所に家を建て替えて引越しました。

私は独身を通したため、老後や健康面での不安から入園を決意しました。今は、ホームの皆様に支えられ安心して暮らしております。

あの頃を思えば、天国のようです。



楽しかった「京都」への二泊旅行（平安神宮にて）

今日一日が大事だと思ふ日々

波 田 シヅヨ（八十二才）



被 爆 地 …… 河原町（爆心地より一・二km）

当時の急性症状 …… 脱毛・外傷

家族の死亡 …… 次男

現在の症状 …… 慢性胃炎・狭心症

被爆時の状況及びその後の生活

主人は微用で、昭和二十年五月から九州へ行っていました。長女は建物疎開に行き、私と、夜勤明けの長男と、次女とが自宅に居りました。次男は神崎小学校四年生で、登校の途中で被爆しました。

私は、台所でちょうど南瓜入りのごはんができたところでした。隣の二階が倒れてきて下敷きになりました。長男に助け出され逃げましたが、かまどの残り火が気になって引き返して消火しました。できていたごはんを持って、次女と江波の方へ逃げる途中、橋の上で兄嫁と一緒の長女に出逢いとても嬉しく思いました。持つて行ったごはんは、困っている人皆で分け合つて食べたことが、今も忘れられません。ひと休みしてから指定避難場所である五日市町へ行き、ここで十日間、お世話に

なりました。その間、次男を一週間捜し続けましたが見つからないので、次男の通学路にあったお骨を拾ってお墓に入れました。家のあった所に帰ってみると、全部焼け野原になっていましたが、防空壕に入れておいた世帯道具は無事で助かりました。

消しずみで板に避難場所を書いて建てました。

八月二十六日、主人が帰り安心したものの何から話してよいか分からず、しばらくは二人共手を取り合って泣くばかりでした。

それからの生活は、筆舌につくしがたいほどひどいものでした。

木材を仕入れてきて、材木町に家を建て、昭和二十五年迄住んでおりましたが、そこが平和公園になるため、代替え地の吉島へ引越すことになりました。

その頃主人が肺炎になりまして、私は四十才にして初めて仕事に就くことになり、六十五才迄働きました。道路の舗装、平和公園の石垣造り、新聞販売等、なりふりかまわず働きました。

昭和四十五年に主人が死亡しました。

子供達もそれぞれ独立し、私は一人暮らしをしておりましたが、心臓疾患があり、健康面での不安から、平成五年、原爆養護ホームへの入園を決心しました。

入園当初は、全国から修学旅行で来られる生徒さん達に、被爆体験を話しておりましたが、子供のことを話すと心臓が痛くなり、最近はまだ参加できなくなりました。

毎朝、今日一日が大事と思い暮らしております。

娘と間違えられた運命の出逢い

平松 ツヤ子（六十九才）



被爆地……的場町（爆心地より一・七km）
当時の急性症状……発熱・出血・脱毛・火傷・外傷
家族の死亡……なし
現在の症状……高血圧症・骨粗鬆症・慢性脾炎

被爆時の状況及びその後の生活

その日の朝、私は、間もなく外地へ移送される兄の事を考えながら、的場の市場に乾燥バナナを買いに市場の軒下に入って直後に、ピカッと青白い光と、ものすごい音と共に地鳴がして、私はそのまま意識を失ってしまいました。気が付くと店の家の下敷きになり、被爆してから二時間もたっていました。

あたりを見ると私と同じように動けなくなつて助けを呼ぶ人や、すでに亡くなつている人もおりました。私は「助けて下さい！」と声の続く限り叫びましたが、誰もが頭も服も手足もボロボロになつていて、自力で歩くのさえやつとでし、私の叫びなど誰も聞こえなかったのです。

両足首には火傷をし、家の下敷きになった下半身は全く自分の力では動きませんでした。

その時、一生懸命私を引っぱり出そうとする人がいます。でもその人は自分の娘でない事が分かると、引っぱる手をやめて、立ち去ろうとするのです。私は思わず、「お願いです！助けて下さい！」とその人にすがり着きました。

今思うと、その時のその人との出会いがその後の私の一生を左右するなんて夢にも思いませんでした。その人は偶然にも私の働いていた店へ豆腐を納めている御主人でした。その方に助けられて、非難所の段原へ背負って連れて行ってもらい、食料品を運んでくれたり、何かと親身になってお世話をして下さったのです。

その後は、比治山の多聞院の軒下や、駅の近くで原爆孤児と一緒に暮らしましたが、その頃、兄が因島に住んでいることを知らされ、訪ねて行きました。兄は、あまりにも変わり果てた私の姿に、始めは妹だとは分からなかったようです。

やっと兄にも会えてほっとしたのもつかの間、被爆者に対する偏見はひどく、逃げる様にして広島へ戻って来たのですが、行く当てもなく、荒神町に住むあの時助けられた命の恩人を訪ねると、黙って優しく迎えてくださいました。

それは寒さが身にしみる十一月の半ばだったと記憶しています。娘を原爆で亡くされたその方と、どこにも行き場のない私、お互いに慰め合い、助け合いながら、その後四十年間も一緒に暮らすことになりました。

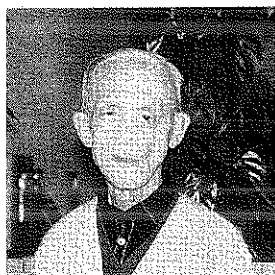
しかし、その方も十年前に亡くなり、しばらくはまた一人で働きながら暮らしていましたが、体調

をくずし、将来の生活も不安になり、知人のすすめで平成七年一月に、舟入むつみ園に入園しました。

あの日の地獄絵のような光景を思い出す度に、戦争や原爆の恐ろしさがよみがえってきます。そして世界中に本当の平和が来ることを祈っています。

家の下敷きになった我が子

福 原 寛（七十六才）



被 爆 地 …… 天満町（爆心地より一・二km）

当時の急性症状 …… 下痢・全身倦怠・出血・食欲不振・外傷・火傷

家族の死亡 …… 長女

現在の症状 …… 高血圧症・糖尿病・肝障害

被爆時の状況及びその後の生活

当時は、比治山近くの土手町に住み、私には妻と五ヶ月になる子供が居ました。

私は、天満町の軍需工場に勤めておりまして、その事務所で仕事中被爆しました。

強い衝撃で意識を失い、気がつくと金庫だけが目につき、あとは人間も、建物も爆風で失くなっていました。

左胸と顔にガラスの破片が刺さっており、ここに居たらまた爆弾に遭うと思ひまして、三滝の方へ逃げました。その途中、黒い雨が降りました。三滝の救護所で傷の手当を受けまして、土手町の自宅へと引き返したのですが、途中の光景は凄まじいものでした。被爆した人達は真黒で倒れており、広瀬橋や相生橋の欄干は燃えており、人影もありません。護国神社の石の鳥居も落ちて、馬が五、六頭倒れておりました。

私は自宅が心配で急ぎました。家は倒壊し妻子の姿はどこにも見当りませんでした。

比治山へ登る途中で妻に会いました。子供は家の下敷きになり、声もしなかったので諦めました。

その後、呉の海軍のトラックに乗せてもらいまして、奥海田の小学校へ避難しましたが、そこで



ホームの「ひな祭り」行事風景

いただいたおむすびの味は今でも忘れません。ここの避難所は重症者が多く、夜も眠れない状況でした。

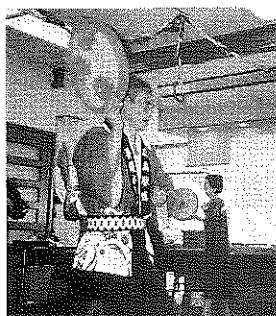
その後、宮島、可部、竹原、四国、大阪と親戚の家を転々とし、広島に帰って来ました。四人の子供に恵まれましたが、昭和三十五年に妻が亡くなりました。子供達もそれぞれ独立し、一人暮らしになりましたが、平成三年に市役所の方の勧めもあり、舟入むつみ園に入園しました。

ホームでの生活は申し分ありませんが、集団生活に伴う人間関係の難しさを感じることもあります。しかし、恵まれた環境の中で、自分流に楽しみ方を見つけていきたいと思っています。

私は、今書道クラブに入っており筆を持つと心が落ち着きます。できる限り続けたいと願っております。そしてここには全国から沢山の生徒さんが修学旅行の際、訪ねて下さいます。五十年前の惨禍をくり返すことのないようにとの願いを込めて被爆体験を語っております。

被爆の苦しみは今も

福 光 勝 美（六十四才）



被 爆 地……八丁堀（爆心地より〇・八km）

当時の急性症状……発熱・全身倦怠・出血・食欲不振・火傷（顔面、

上・下肢）・外傷（両下肢）

家族の死亡……なし

現在の症状……貧血症・高脂血症

被爆時の状況及びその後の生活

私は、鳥取県の生まれですが、島根県の浜田海員養成所の生徒として、広島の暁船舶に向うため、八月六日朝広島駅に着き、目的地の宇品に向う途中、八丁堀で被爆しました。

強い衝撃を受け何かなんだか分からず気がついて起きあがてみると、広島街は真暗闇、かすかに聞こえるのは人の悲鳴と、うめき声、私はそれを聞き無我夢中で逃げました。途中で息が切れ倒れてしまいました。私はこれで死ぬのかと思いました。するとかすかに人の声が聞こえてきました。それは私達を收容するための作業員だったのです。私はトラックに乗せられ港に着き、ポンポン船に乗

せられ、着いた所は似ノ島で、そこは死人を焼く所でした。このままでは私も焼かれてしまうと思い必死で体をゆすぶりました。誰かがそれを見つけ「この人はまだ息があるから、もう少し置いておこう」と言ってくれたので助かった。でもここに居たらいつ殺されるか分からないという恐怖の日々でした。三日後、宮島へ送られました。私はそこに來ていた通信隊の女性に頼み、鳥取の両親に手紙を書いてもらい、今おかれている状況を知らせました。二十日ばかりして両親が来てくれましたが、すぐには動かせる状態ではなかったため、母親が残り三ヶ月間看病してくれました。しかし、自力で動けるようにはならず、宮島の青年に頼んで、二人がかりで鳥取へ連れて帰ってもらいました。家で一年くらい療養し、何とか動けるようになり、働かなければならず仕事を探しましたが、ケロイドのためかどこも使ってくれる所はありませんでした。両親と相談し、昭和二十一年二月大阪へ出ました。昭和三十六年被爆認定を受けましたが、常に健康に対する不安がつきまとうております。

平成四年一月入院先から舟入むつみ園に入園しました。今、私が思うことは一日も早く、生きている間に国家保障に基く安心した生活ができるようにしていただきたい。

この五十年間私にとっては、とてもつらい毎日でした。再びこのような悲惨なことが起こらないようにと願っております。

父さんの分まで生きるよ

光 本 隆（六十八才）



被 爆 地 …… 南観音町（爆心地より二km）

当時の急性症状 …… 下痢・発熱・全身倦怠・出血・脱毛・食欲不振・

火傷・外傷

家族の死亡 …… 父

現在の症状 …… 脳動脈硬化症・糖尿病・脳梗塞

被爆時の状況及びその後の生活

特攻訓練を受けていた私は、「最後に家族に会いに帰れ」と言う上官の命令を受け、休暇をもらい自宅に帰っていました。その朝は、家族で朝食をすませくつろいでいた時でした。

何とも言えないオレンジ色の閃光が走り、それとほとんど同時に、ものすごい音がしたことまでは覚えています。うすれて行く意識の中で、「雷が落ちたのでは」と思ったとたん私の意識は全く失われました。

それからどのくらいの時間が流れたのでしょうか。気が付くと家の下敷きになり、身動き出来ない状

態でしたが、かろうじて動く首を上げて囲りを見ると、一面焼け野原で、身動き出来ない私は、もうこれで人生の終わりだと思ったとたんに、友達に救い出されたのですが、家族の顔は誰一人見えないんです。父は、母は、兄はと思つたのですが、今は自分がここから逃げる事しか、頭にありませんでした。友達と二人で己斐に逃げ、それから中島小学校の校長をしていた友達の父親を頼つて、高須に行つたのですが、不在だつたために草津の小学校へと逃げたんです。

そこで、偶然にも父と兄に会うことが出来て、お互いの無事を喜び合つたのもつかの間、父はその三日後に亡くなりました。近くに暁部隊があり、その衛生隊員の手で、私の体中の傷を二十三針も縫合してもらい、出血も止まりましたので、草津の正順寺という寺へ収容されました。父は、兄と私とで最後をみとつたのですが、母のことが心配で心配でたまりませんでした。しばらくして、湯来町へ収容されていた母が、誰かの報せを受け、正順寺を訪ね来ました。一ヶ月半程して、やっと歩けるようになった私と兄は、元の住所にバラック建の家を建て、親子三人で生活を始めたのですが、兄弟二人とも働ける状態ではなく、半年くらいで、姉の嫁ぎ先の湯木（当時砂谷村）で教員をしていた姉を頼つて行き、生活を始めました。

体も順調に回復して参りましたので、姉や知人から教員の職をすすめられ、六十一才まで教職に付いておりました。

その間結婚し、安定した生活をしておりましたが、六年前に妻を亡くし、独り暮らしになりました。市役所の保健婦にすすめられ、平成五年七月に当ホームへ入園しました。とかく男一人の生活は不自由なものです。炊事、掃除、洗濯と総て独りでやるのは本当のところ苦痛でした。ホームに入つてか

らは、それらのことから解放され、好きな読書などをして老後を楽しんでおります。
五十年経った今も、被爆の後遺症で苦しんでいる被爆者が沢山います。再び、このような悲劇を起こさない為にも、多くの方に平和資料館をみていただき、被爆者の生の声を聞いていただきたいと思います。

原爆のショックで動かなくなった胎児

湊 富士子（八十二才）



被 爆 地……東観音町（爆心地より一・三km）
当時の急性症状……下痢・全身倦怠・脱毛・外傷
家族の死亡……なし
現在の症状……骨粗鬆症

被爆時の状況及びその後の生活

当時夫は失明したため退職して家に居ました。私は六ヶ月の身重、四才の娘は近所に遊びに行っていました。

私は食後の後片づけをし、ふきんを干していました。突然目の前が真暗になり、気がつくの外に立っていました。

我に返り目の見えない夫を捜し無事を確認しましたので、この場を動かないようにと話し、娘を捜しに走った。道路には焼け焦げた人々があふれ、回りは火の海でした。私は出来る限りの大声で娘の名を叫びながら走り回りました。

娘は放心状態で焼野原に立つておりました。手・足に怪我をしており、私の顔を見るなり嗚咽おえうし喋れない状態でした。顔に手を当てると血まみれでした。娘を連れて家に帰ると家が燃えており、呆然と立ちすくんでしまいました。その夜は、空港近くで野宿をし、ともあれ家族全員が無事であることに感謝しました。

その後、近所の人達十人と焼け残った木材でバラックを建て、二畳の部屋で皆一緒に生活を始めました。

私は妊娠中でしたが、原爆のショックで胎児が動かなくなり、心配で日赤病院を受診しました。病院は医師も少なく、予定日迄待つようにと言われました。その日がきて十二月に入院しましたが、胎児はすでに死亡しており出ないため、手、足を切斷し出しました。男の子でした。赤ちゃんは病院の広場で茶毘だびに付しましたが、何とも言い表わしようのない悲しみを味わいました。

その後は、転々と職を変え生活を支えてまいりましたが、昭和五十四年夫は二週間の入院後、他界しました。それ以来一人暮らしになりました。

それ迄住んでいた家が老朽化し不衛生なため、市役所の方にホーム入園を勧められ、決心しまし

た。

入園後は、昔習ったことのある三味線を始め、行事の時等出演させていただき、充実した日々を過ごしております。

被爆の怪我今も痛み眠れない

見崎 ヨシ子（八十三才）



被爆地……天満町（爆心地より一・二km）

当時の急性症状……下痢・発熱・食欲不振・外傷

家族の死亡……なし

現在の症状……メニエル氏病

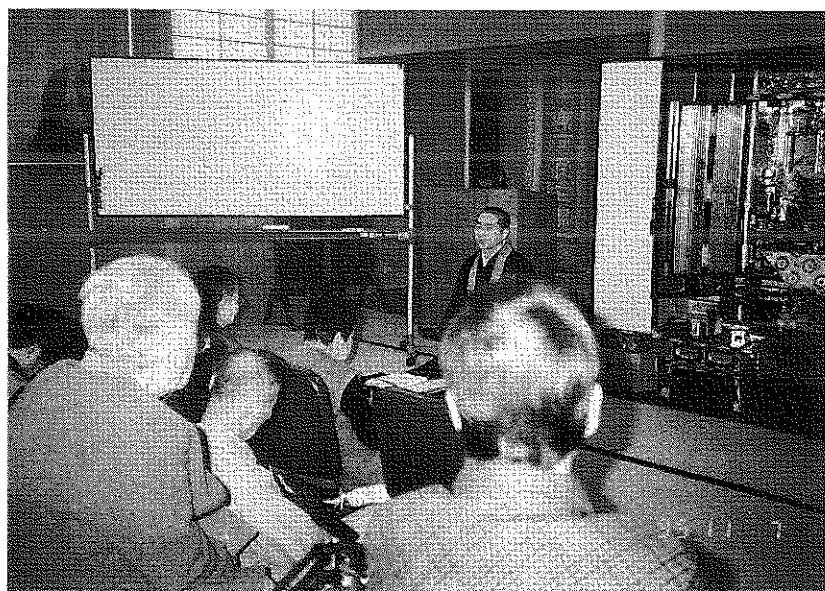
被爆時の状況及びその後の生活

主人は徴用で日清製鋼へ行っておりましたが、八月六日は仕事が休みで家に居ました。八才になる子供は強制疎開で居りませんでした。その頃私は洋服の仕立てをしていたものですから、店の電話が鳴り受話機を取った瞬間でした。床全体が上って、急降下したような衝撃があり、私は前かがみで倒

れました。倒壊した家の下敷になり、足にはガラスが刺さっておりましたが、なんとか自力で出ることができました。血だらけになりながら瓦礫の下敷きになっている主人を引き出して「私について来なさいよ」と言って福島川の方へ逃げました。後をふり返ると一緒に来たはずの主人が居ません。飛行機で再空襲があると聞き逃げましたが、もう逃げ場がなく、川に浮いていた下駄を拾って頭にのせました。そこで隣組の組長さんに会い、一緒に己斐の日野様宅へ避難し、四日間お世話になりました。

その後、佐伯町の実家へ帰りましたが、私の足の傷を見て、兄嫁が病気がうつるかも知れないと心配しておりました。

昭和二十一年事情があつて主人と協議離婚。子供は私が引き取りました。洋服の仕立をして育てましたが、高校卒業後大阪へ行き、今でも大阪で暮らしております。私は四十六才で再婚致しまし



毎月の法話風景

だが、夫は昭和五十四年一月に亡くなりまして、それ以来一人暮らしになりました。メニエル氏病になつて健康に自信がなくなり、一人暮らしが不安になつて、平成五年七月舟入むつみ園に入園しました。五十年前の怪我は今も痛み眠られず苦しんでおります。体調悪く行事への参加はあまりできませんが、毎月の別院法話を楽しみにしております。

足の痛みが語る五十年前

宮川 敏子（七十七才）



被爆地……東観音町（爆心地より一・三km）

当時の急性症状……左足の損傷・脱毛・出血

家族の死亡……妹

現在の症状……高血圧症・高血圧性心疾患・狭心症・耐糖能障害

被爆時の状況及びその後の生活

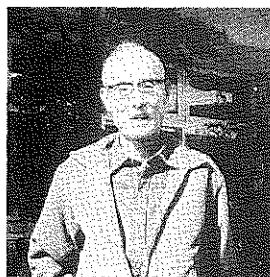
東観音町为天満川近くに住んでいて、私は、本川橋西寄りの会社に務め、妹は、中国新聞社ビルの放送局へ務めておりました。五十年前の八月六日、朝から太陽は照りつけ暑い日でした。妹は、放送

局へ出た後でした。八時十五分あの悲劇がおこりました。一瞬の内に家屋の下敷きになり、やつとの思いでなんとか這い出ることが出来ました。川の中には沢山の人が流れていました。福島町を通り己斐小学校へ逃げ、傷の手当てをして貰い、そこで一晚野宿をしました。右足の切傷はひどく痛み、次の朝は電車で地御前まで行き、父親に会えたその時は嬉しかったです。一度に体中の力が抜け涙がポロポロ出たこと、その時初めてむすびを一つ貰って食べたあの味、本当に美味しかったです。今もあの時の感動は、忘れはしません。それから父と二人で三次の伯母の所へ行くため、矢賀駅まで歩いて行きました。妹が気になって父が捜しに、中国新聞社の方まで行ってみました。そこで耳にしたのは悲しい知らせでした。若い女性が二人折り重なるように死んでいた。その内の一人が妹だと思いが遺体は焼かれたと聞いたそうです。父は手に少しの骨を持って帰りました。あの日以来、妹は我が家に帰ってきておりません。伯母の家に落ち着いた時には、夏の暑さで傷は化膿し、うじがわき、髪の毛は抜け、出血は止まらず悲惨な毎日でした。昭和四十三年に結婚しましたが、先妻の子供を残して五年後に夫は死亡、その娘も今は結婚し、又一人暮らしとなりました。年令と共に病気の数も増え、一人暮らしに不安を感じるようになり、ホームにお世話になることにしました。

あの頃を思えば、今は、物質的には恵まれ、何不自由も無いのに、私の左足には今だに痛みが残っています。この痛みがある限り、五十年前のことは、忘れることは出来ません。

虹色と思う瞬間すごい爆風が

森 尾 悦 郎（七十二才）



被 爆 地……打越町（爆心地より一・八km）

当時の急性症状……発熱・出血・食欲不振・火傷・外傷

家族の死亡……なし

現在の症状……遊走腎・心室性期外収縮

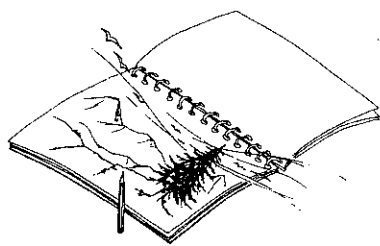
被爆時の状況及びその後の生活

当時私は憲兵でした。安芸女学校の壁の所を歩いておりますと、シューという音が聞こえ、きれいな虹色と思う瞬間凄い爆風が起こり、立っておれなくなり地面に伏せました。変なおいがしたので息を止めた。（この時悪い空気を吸わなかったのも肺等の病気は無い）左側面・背中一面を火傷し、陸軍病院に入院しました。毎日ガーゼ交換とヨーチンを塗布するだけの治療ですが一向に良くなりません。一般病棟に一〇〇人入院していましたが、皮膚が紫色に変わると、翌日には亡くなっておりました。私は火傷の処からまだ膿が出ていましたが、明日は我が身のような気がし、田舎に帰りた一心で転地療養を申し出ました。今迄経験したことの無いむなしさ、悔しさ、情けなさでいっぱい

の毎日でした。

その後田舎に帰り、叔母の家で療養しましたが、発熱と激しい痛みがあり日赤病院を受診、「遊走腎」と診断されました。体の不調が続き、何度も転職をしなければなりませんでした。親から貰った財産は、医療費と生活費ですぐなくなり、三十年の間二人の妹から一人七萬円ずつ仕送りをしてもらって生活していましたが、それも難しくなつて昭和五十八年から生活保護を受けておりました。

病氣と一人暮らしの不安から、平成七年五月舟入むつみ園に入園させていただきましたが、今では、病状は安定し、ひどい痛みもありません。しかし自分一人だけの生活が長かったため集団生活になかなかなじみません。一日も早く皆さんと打ち解けられるようにしたいと思いますとおります。



郵便配達をしながら生活を支える

矢 島 春 枝（八十七才）



被 爆 地 …… 三篠本町（爆心地より二・五km）

当時の急性症状 …… 両足・甲の浮腫

家族の死亡 …… なし

現在の症状 …… 高血圧症・陳旧性心筋梗塞・狭心症・慢性肝炎

被爆時の状況及びその後の生活

結婚後、神奈川県に住んでおりましたが、昭和十九年に夫が急性肺炎の為急死をしました。

その為、三人の子供を連れ広島市三篠本町に帰って来ました。私は、当時飛行機部品製作工場で、学徒動員生の現場監督として勤務していました。

八月六日の朝、飛行機が襲来するため、戸の外で空を眺めておりました。その時大爆音が響き一瞬地面に伏せました。気が付くと工場は爆風で倒壊していました。路上には、うめき声と共に怪我をした多くの人達が横たわっており、川面には沢山の死体が浮いており、それはとても悲惨な情景でした。自分たちは、工場の裏手にある竹やぶの中で知人と一緒に一週間を過ごし、その後、大芝の知人宅の

離れを借り子供と一緒に暮らすが、次男が両足背中に大火傷を負いましたが薬がなく、油を塗布しましたが、傷口にうじ虫がわき、完治する迄大変で、付きっきりで看病をしました。昭和二十一年四月から基町郵便局で配達員として十五年勤務し、生計を維持してきました。その後、郵便局の保険課へ異動があり、六年間勤務しましたが、子供三人共独立し、年金も取得出来るようになったため、退職しました。それからは、お寺の手伝いをさせていただきながら、一人暮らしを続け、趣味は老人会の合唱コーラスに入り、楽しく現在に至っています。

平成三年に軽い心筋梗塞で入院しました。その後は発作もなく、安心して生活しています。

平成五年七月に市立舟入病院に隣接した舟入むつみ園に入園し、時々合唱コーラスに通い、またホームに於いては、同室者の方達と楽しく、安心した老後を送っております。

父と姉達の遺体にすがって

山田 文枝（八十才）



被爆地……東雲町（爆心地より三km）

当時の急性症状……なし

家族の死亡……父親・姉二人

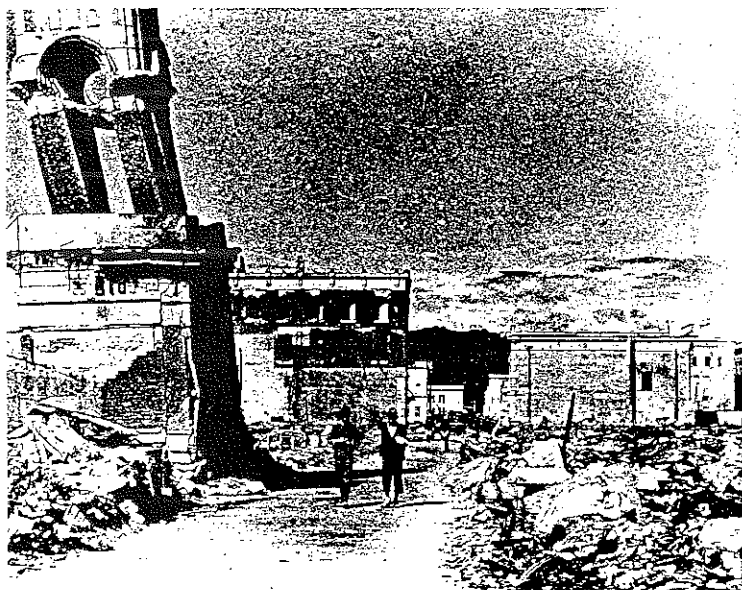
現在の症状……慢性胃炎・乳癌術後変形性関節症

被爆時の状況及びその後の生活

その朝は、近くの公衆電話で電話を掛けに行った帰りでした。異様な光と同時にドーンという音がしたと思うと、地割れの様に道路が動いた様に感じました。私は、とっさに近くの家へ飛び込みましたが、爆風で窓ガラスが粉々に割れ、頭を押さえて座り込んでいる私の回りも、土壁で埋もれていました。どこをどう歩いたのか気が付いたら、自宅の庭で放心状態で立っていたのです。幸いに、主人も出勤前で家に居り無事でした。一時間程すると、街の中心部から被災された人達の行列が続くのですが、その姿は皆一様に頭を下げ、手を前に出し、手首をさげて、どの人の服も半分以上は焼けて裸同然の姿なのです。これはただ事ではないと思い、材木町で下駄屋を営んでいる実家の父の事が心

配で、主人と二人で行きましたが、実家のあった家附近は跡形もなく、その焼け跡に父と姉が並んで黒こげで死んでいました。私と主人は、何が起こったのか分からないままに、「どうしてヨノどうしてノ」と泣きながら残材で二人の遺体を焼き、骨の一部を持ち帰りました。それが原爆という恐ろしいものである事を知らされたのは、ずっとあとになってからのことです。

実家のあった焼けあとに、消しずみで私の連絡先を書いておいたのですが、次姉から何の連絡もないので、打越町の次姉の家に行って見ましたが、家はすっかり焼け、その焼けあとに、新婚七ヶ月の次姉夫婦が重なる様にして亡くなっていたんです。私と主人は、父達を焼いた様に残材で二人を焼き、骨を持ち帰りましたが、その帰り道にも無数の遺体が横たわっており、ハエがたかり、その遺体にはうじ虫がうようよしていて、私は生き地獄だと思いました。



本通りの時計台 本通り商店街の廃墟から西方を望む。
爆心地から約700メートル。(中国新聞社提供)

戦後、いくらか生活も落ちついた頃に、長男そして長女も生まれ、平凡ながら親子四人幸せな生活を送っていました。昭和五十年主人が亡くなり、その後、子供達も各々結婚し自立しました。長男夫婦と三年程同居しましたが、共働きでもあり、身の回りの世話が必要になった場合に介護してくれる人がいないと思い、平成六年の五月に自ら希望してホームに入園しました。

今はとても幸せです。ただ集団生活ですので時には自分の思う通りにならない事もありますが、息子の家や娘の孫達に会うのが一番の楽しみです。

あれから五十年たった今頃になって、改めてあの時の惨状を思い出して、よくも精神的にも肉体的にも絶えてこられたものだと考える今日今頃です。若かったからでしょうネエ。

もう戦争はいやです。本当に……。

